



2012年5月

「大阪日伊協会 55 年の歩み」が出来上がりました

一年半がかりで編纂作業をして参りました「大阪日伊協会 55 年の歩み」が刊行の運びとなり、皆様の元にお届けすることとなりました。

終戦から 11 年、戦禍を被った大阪の街から発信されたイタリア情報を、地道ながら絶えることなく積み重ねてきた足跡の報告です。その陰に法人、個人の会員の皆様を含む協会内外の方々、更には関係諸機関の長きにわたるご助力があつて成果に結びついたことは申すまでもなく、刊行に際し、まず御礼を申し上げる次第です。

ご承知のように明治新政府は近代日本の礎を欧州の列強、ドイツ、フランス、イギリスから文明、文化を学び、吸収することに重きを置き、「富国強兵」「殖産興業」の旗印を掲げ、国家作りにいそしみました。同じ圏内に属していたのにイタリアは遠ざけられ、そのうえ英、独、仏が持つイタリアなどヨーロッパ南部に対する差別感まで共有するようになり、イタリアは一步さがった国という認識が定着していました。しかし、近年の日本におけるイタリアは全く異質なものです。フレンチをしのぐイタリア料理の興隆だけでなく、くるまやファッション、住環境といった生活文化面でも、今やイタリアンの存在感は強固なものとなりました。

そうした日伊のいい関係は、人と人の交流、親善、助け合いといった付き合い方が行き渡ってきたためです。よくいわれる似たもの同士という親近の情もありましょう。あふれるばかりのガイドブックもイタリアを売り込んでいます。手前味噌をお許しいただくならば、大阪日伊協会の半世紀を超す活動は現下の高まりと無関係ではありません。メセナという社会貢献の先駆けをなし、草の根の外交に実績を残してきた企業文化は、会社創立もない時期に協会を発足させた朝日放送トップの英断があつたからといえます。

「55 年の歩み」は、協会の果たしてきた実績をまとめ、記録性も重視しながら、半世紀におよぶ日伊事情とその交流の成果にふれています。陽気で明るく、しかし緻密な対応力、深い洞察にも富んだイタリアと関西との文化的触れ合いの足取りを、よりご理解いただけるならば幸いです。

大阪日伊協会
会長 西村嘉郎